

派遣者番号	R7K01	氏名	穂山 直人
研究主題	読解と読書活動を繋ぐ文学の指導 －初発の感想を手立てにして－		
派遣先大学	創価大学教職大学院	指導担当者	石丸 憲一
所属	新宿区立西戸山小学校	所属長	篠塚 幸次

キーワード：文学・読書指導・読解指導・初発の感想

要旨：生涯、本に親しむ子供たちを育てていくためには、様々な場面における読書活動を活性化させることに加えて、本の魅力を味わうことができるような読むスキル・技能も同時に育成していく必要がある。現状の国語科における読書指導の欠落を補うべく、本を読むスキル・技能を国語科の文学の授業で育成することを目指していく。そのために、初読を充実させることに焦点を当て、抽出児童の2年間の初読の記述を分析し、本を読むスキル・技能が身に付いているかを考察していく。

読解と読書活動を繋ぐ文学の指導 —初発の感想を手立てにして—

創価大学教職大学院教職研究科（人間教育実践リーダーコース） 穂山 直人

キーワード：文学、読書指導、読解指導、初発の感想

1 問題と目的

令和6年度実施の全国学力・学習状況調査のアンケート調査では、自宅にある本が10冊未満と答えた児童の割合が全体の15%ほどいたことが示された。

腰越(2015)は、児童の不読現象の理由について第57回学校読書調査のデータを基に分析・考察をしている。そこで、現代の日常生活においてTV・携帯・電子ゲーム等の様々なメディアの普及が読書活動を阻害する背景として浮かび上がったことを述べている。

では、この阻害背景を超える読書の魅力とはなんだろうか。大村(1984)が「本を読んでいる間に、読んでいなかったときとは違った心の変化のようなものが起こる、それが読書から得るものなのであって～中略～読むということをしている、ひとりの人間が生命のひとこまを使って『読む』という一つの仕事をしている、その心の中に何かが生み出されてくる、何か一つの方向のようなものが開かれてくる、それが読書だと思いました。」と述べている。こうした、本を読み、読書世界に浸ることで、読者の内面での変容が大なり小なり生まれ、そこから自分の世界を広げていくことができるのが読書の魅力ではないかと稿者は捉えている。また、日常生活での機会が減少する読書活動に対して、その効用を児童に体験させるには国語科の文学の授業を活用するのが妥当であると考えた。

しかし、内容を十分に理解せず、表面的に読んだだけで終わる浅い読書では、本がもつ魅力に辿り着くことは非常に難しくなる。青山(2020)は、

「読むことの指導過程に位置付けられていないことで、『読むこと』を中心とした単元でさえ読書指導が行われなことが懸念されている。」と述べている。このこと背景には、長い間、学習指導要領における読書活動に関する記載が態度面についての内容がほとんどで、本を読むスキル・技能については触れられてこなかったことが影響していると考えられる。

そこで、生涯、本に親しむ児童を育てていくためには、様々な教育場面における読書活動を活性化させることに加えて、本の魅力を味わうことができるような読むスキル・技能も同時に育成していく必要があると考えた。そして、読むことの指導における読書指導の欠落を補うべく、本を読むスキル・技能を国語科の文学の授業で育成する足がかりとして、稿者は初読を充実させることを考えた。

2 方法

稿者は、令和5・6年度に2年間担任をした第5・6学年の学級の児童を対象にして、国語科の5本の文学単元において初読直後の感想

（以後、「初発の感想」とする）を書く活動を行った。担任した35名のうち、様々な学力層から抽出した4名の児童の初発の感想を比較・分析しながら進めていく。

ここでは、文学の授業での初読が日常の読書に近いものと考え、2年間の児童の初発の感想を分析することで、読むことの指導と読書活動を結び付けられると考えた。先行実践を基に稿者が考察した読書に必要な読む力である「①文

中の様々な表現を関連させながら理解し、それらのよさを味わうことができる力。」「②本からメッセージを受け取り自分なりの感想をもつことができる力」が身に付いているかを2年間の児童の記述の分析を基に考察していく。

3 結果

紙幅の関係上、A児（授業中も意欲的に発言をしてノートをとるなど学習に前向きな児童）に焦点化し、実践開始直後と実践の終了時の記述の変化を記載する。

・「なまえつけてよ」（第5学年4月）

春花が一日中考えていた馬の名前は何かあったらだろう。春花の悔しさを優太は分かって子馬の折り紙をあげていて優しいと思った。

初発の感想は2行のみである。感想と疑問のみであった。どの児童も4年生までに初発の感想を書く経験はしてきているとのことであったが、学習に前向きな児童の初発の感想としては質・量ともに物足りなく感じた。

・「たずねびと」（第5学年10月）

たずねびとは、綾がアヤのことについて心に残り、行動に移すくらい「知りたい」という強い気持ちをもっているのがすごいと思いました。今いる場所でも爆弾が落ちていたらそうなっているのか想像ができません。昔の人の気持ちを知りたいなと思います。ダッシュがあるところは綾の気持ちが分かりやすかったです。

感想に加えて、現在の日本の様子と比較して読むことができるようになってきていることが記述から分かる。また、文中のダッシュなどの表現にも注目して読むことができおり、そこから中心人物である綾の気持ちを読み取ることができたとのことをまとめていた。

・「大造じいさんとガン」（第5学年2月）

大造じいさんは、最初「ひと泡ふかせてやる。」という残雪への思いがあったけれど、残雪

が仲間が危ない時に、人間もハヤブサも見えなく、ただ救わなければいけない仲間の姿だけ見える、というのが頭領らしくかっこよかったです。それに大造じいさんは心を打たれたから、「おうい、ガンの英雄よ…」という声を掛けたのではないかと思いました。毎年の戦いで大造じいさんの心の変化が随分とありました。最初の「大きな丸太がパチパチと燃え上がり…」という表現がとてもおしゃれで、その時代の雰囲気伝わってきました。

初読の段階で、自らの尊厳を守ろうとする大造じいさんの心情を読み取れたことが分かる。主題としてまとめているわけではないが、内容的には主題に迫ろうとする思考が見てとれる。また、登場人物の心情が読み取れるような表現ではないものの、物語冒頭の囲炉裏の部分を描いた箇所から、本人がおしゃれな表現と感じた箇所を見つけることができた。文章表現に目を向けながら読むことがだんだんできるようになってきていることが分かる。

・「帰り道」（第6学年4月）

私は、この帰り道というお話を読んで、ものすごく共感したし、「今の私だな。」と思いました。みんなとお話をしている時、自分だけその場に馴染めていなくて、意見がかみ合わなかったり、その場の雰囲気に合わなかったりすると、「帰り道」の律と周也のように外れてしまいそうになることもあります。そのような6年生でありそうなことが書いてあり、とても共感できました。

初読の段階で登場人物の変化に目を向けたり、自分と重ね合わせて読んで言語化することができるようになってきたりと成長がうかがえる。「6年生でありそうな～」という記述にもあるように、中心人物に同化しつつも、ある程度作者側の意図も考えながら、一歩引いたスタンスで読むこともできていることが伝わってくる。

・「海の命」（第6学年2月）

太一は、おとうが死んでいた瀬に行きもぐってみると、青い目で瞳は黒い真珠のようなものを見て、父が命を落とす原因となった瀬の主と出会ったが複雑な感情になったのだと思う。きっと太一はこれまで数限りなく魚を殺してきたが、様々な経験から成長した太一がクエを海の命として殺さずに守ろうと思えるようになったのだと感じました。（抜粋）

物語の内容は簡単なものではないが、太一的心情の変化から物語の主題を捉え、初発の感想の段階で書けるようになっていく。クエを表す描写にも目を向けることができている。全文を掲載することは紙幅の関係上できないが、様々な観点から物語を捉え考えたことをノート3ページ分に渡ってまとめることができた。

また、「海の命」の実践後、児童自身が読みたい本や興味がある本を一冊選んで読み、自身の読みをノートにまとめる学習を実施した。すると、2年間の国語の時間を通して行ってきた初発の感想を書く活動と同じように、これまでの経験を生かして主題を捉え、感想をまとめることができた。

4 考察

個人差はあるものの、A児以外に抽出した児童の初発の感想にも、質・量ともに高まりが見られた。読書のスキル・技能として稿者が考察した「①文中の様々な表現を関連させながら理解し、それらのよさを味わうことができる力」を5年生の段階から指導していく中で、「②本からメッセージを受け取り自分なりの感想をもつことができる力」が段々と身に付いていったと捉えられる。第6学年の単元における記述を見ると、初読の段階から自身が作品や作者からのメッセージを受け取ろうというスタンスで読み、主題を自分なりにまとめている記述が少しずつ見られるようになってきていた。これをさらに繰り返して実施していったことで、自身の読みたい本を読み、まとめる活動においても、文学の授業での学びが活かさ

れている記述が多くなっていった。

また、読書のスキル・技能を身に付けさせることと同じくらい、読書に親しむ活動についても定期的実施しながら、指導者の側が読解指導と読書指導のバランスを考える必要も感じている。今回の2年間の実践は、どちらかという読書のスキル・技能を身に付けさせることに重点を置いて実施してきた。来年度以降、教育現場に戻る際には、読書に親しむ活動にも力を入れながら、さらに本が好きになる児童を育成していく。

あわせて、児童が初読で培ったスキル・技能を生かして読書のよさや意義を感じることができるよう、実践を積み重ねていきたい。

【引用文献】

- 1) 青山由紀(2020)「現代の子どもと読書指導の課題」月刊国語教育探究2020年7月号 日本国語教育学会
- 2) 大村はま(1984)「大村はま国語教室⑦(読書生活指導の実践①)」筑摩書房
- 3) 腰越滋(2015)「子どもの『不読』現象の背景要因は何か?『第57回 学校読書調査』の分析結果に基づく再考察」
- 4) 文部科学省(2025) 令和6年度全国学力・学習状況調査回答状況集計(児童質問)より (<https://www.nier.go.jp/24chousakekkahouko/ku/factsheet/primary.html>)